一八八四年六月三十日（月）

聖ラーマクリシュナ、南神村(ドッキネーショル)において学者シャシャダル及び信者たちと共に

カーリーとブラフマン――ブラフマンとシャクティは不異(おなじ)

聖ラーマクリシュナは、あの馴染み深い部屋で信者たちといっしょに床に坐っておられ、そばに学者(パンディット)シャシャダルがいる。床に敷物が広げてあり、その上にタクール、学者(パンディット)シャシャダル、それから数人の信者が坐っているのである。何人かの信者は床の上に直接(じか)に坐っている。スレンドラ、バブラーム、校長、ハリシュ、ラトゥ、ハズラー、マニ・マリックたちが同席していた。タクールは、学者パドマローチャンのことを話しておられる。パドマローチャンはボルドワン藩王のお抱え学者であった。時間は午後四時近い。

今日は月曜日、キリスト暦一八八四年六月三十日。六日前の聖なる山車祭(ラタ・ヤートラ)りの日、タクールは学者(パンディット)シャシャダルとカルカッタでお会いになり、何かとお話をなさった。今日は学者が訪ねて来たのである。いっしょにブーダル・チョットパッダエと彼の兄が来ている。学者はカルカッタの彼等の家に滞在しているのである。

この学者は智識（ジュニャーナ）の道を探求している人物だ。タクールは彼に、このことをわからせようとしておられるのだった――つまり、永遠なる御方が遊戯（リーラー）（変化活動）なさるのだということを――。完全円満なサッチダーナンダご自身が、遊戯（リーラー）のために様々な色相（すがた）をお取りになるのだということを――。神の話をしておられるうちに、タクールは外意識をなくされた。法悦に酔った有様で話をしておられる。学者に向かってこう言っておられる。――「親愛なる兄弟、ブラフマンは不変、不動で、スメール山のようだ。でも、その〝不動〟であるものが、〝動〟でもあるんだよ」

タクールは愛の喜びに恍惚となられた。そして、天上の楽神ガンダルヴァも及ばぬあの声音（こえ）で歌をおうたいになる。次から次へとお歌いになる――

カーリーの性（さが）と相（すがた）を知るは誰ぞ
六派の哲学　はるかに及ばず

一八八二年八月五日に全訳あり

（歌）マーは普通のただの女か
その名を唱えることにより
死毒を飲んだシヴァも助かる
創造も維持も破壊も
その目のまばたき一つ

無限の大宇宙世界を
いとも軽くその胎に宿して――
その足元を隠れ家として
天地の神々　安らかに憩う
神々のなかの大神マハーデーヴァは
その足の下に身を横たえる

(歌)マーは単なるシヴァの妃にあらず
あの方の前には死神も平伏す
はだかの姿で反抗者を滅し
マハーカーラ(シヴァ)の胸に立つ
いかなる理由で夫神の
胸を踏むかと思い見よ
プラサード詠いぬ――マーの遊びは
あらゆるものを略奪す
心よ　注意深く精進しろ
さすれば智慧は得られん

マハーデーヴァ――「偉大な神」の意。シヴァ神の別名

（歌）われ飲むはこの世の酒ならぬ
永遠に芳ばし神の甘露酒
大実母カーリーに栄えあれと
身も心も喜びに酔いしれぬ
わが師の賜りし教えに
わが熱情をそそぎて醸す
智の酒の燃ゆる壺より
われ飲みて心酔いたり
根本なる真言はカーリーの御名
唱え念ずれば六根清浄なり
唱うれば身も心も清く
神の甘露酒飲みて生命の
四つの実を獲れとプラサードは言えり

（歌）シャーマの宝は誰でもつかめるか――
愚かな鈍い心では
どうして、どうして　とどかない

四つの実――正義、富、愛、解脱

シャーマ――カーリーの愛称、黒色の意

大神シヴァさえ修行のあとで
紅むらさきのあの足を
まれに抱くことが出来るだけ

タクールの恍惚境はやや醒めてきたようだ。歌うのをお止めになった。少しの間、黙って坐っておられる。小寝台に行かれて、その上にお坐りになった。

学者シャシャダルはタクールの歌に魅了されていた。彼は非常にていねいな態度でタクールにお聞きした――「もっとお歌い下さいますか?」

タクールは少し間をおいて、再びお歌いになる――

シャーマの御足もと　大空高く
わたしの心の凧は天翔けていた
よこしまな風をまともにうけて
急にかたむいて落ちてしまった

一八八三年三月十一日に全訳あり

(歌)　こんどこそ私はよく理解(わか)った
よく知っている人から〝この世の秘密〟を教えてもらった

夜のないあの国から一人の男がきて
それから私にはもう昼も夜もなく
日毎の勤行（つとめ）にも用はなくなった

（歌）無畏の足元に命を託し
われすでに死王（ヤマ）も恐れず
大いなる真言（マントラ）カーリーの名を
わが髪束の頂きに結び
この世の市場（いち）に肉体（み）を売りて
聖（きよ）きドゥルガーの名をば買い来ぬ

〝ドゥルガーの名をば買い来ぬ〟――この言葉を聞いて学者は涙を流していた。タクールはまたお歌いになる――

カーリーの名の万願結実（カルパタル）の木を
私は胸の野原に植えたよ
死王（ヤマ）が来たら胸をひらいて

この木が育っているのを見せよう
体のなかの六つの敵は
はるか彼方に追い散らして
ドゥルガーの名を讃えながら
安らかに旅立とうとプラサードは言う

六つの敵――色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、愛着

(歌)心よ　自らのなかに住み
よそびとの家に行かざれ
求むるもの　坐して得られん
自らの奥深くこそ

タクールは歌を通じて、「信愛のほうが、解脱よりもすぐれている」と言っておられる。

解脱がほしいと言うのなら
わたし(クリシュナ)は気軽に与えもするが
けれども純な信愛を
ほしいと言われては困るのだ

なぜならこれを獲た人は
あらゆるものに打ち勝って
すべての人にかしずかれ
三界の勝者となるからだ

純な信仰はまたひとつ
ブリンダーヴァンの牧場（まきば）のはなし
きみたち牛飼い乙女（ゴーピー）たちだけで
他は知らない秘密のはなし
深い信愛にほだされて
わたしはナンダの家に住み
ナンダを父と呼び仕え
頭に荷をのせて運んでいるよ

ナンダ――クリシュナの養父

経典を読んで学者面（づら）するのは間違い――修行が必要――覚者のこと

学者シャシャダルはヴェーダその他の聖典経典を広く読み、真理の智識を研究している。タクール

は小寝台の上から彼を眺めながら、いろいろとたとえ話をしながら教訓していらっしゃる。

聖ラーマクリシュナ「(学者に)ヴェーダや何か、沢山の聖典があるがね、でも修行や苦行をしなかったら神様にはとどかない。六派哲学でも、ヴェーダでもタントラでもとどかない。

とは言うものの、聖典に書いてあることをよく勉強して、それに従っていろいろすることだ。ある人が手紙を一通失くした。何処へおいたのか思い出せない。そこでランプを手にもって探しはじめた。二、三ヵ所探すと手紙は見つかった。それには、〝五シアの菓子と着物を一枚送ってくれ〟と書いてあった。それを読んでからその人はその手紙をポイと捨てた。もう必要がないから——。今度は五シアの菓子と着物を一枚送りさえすればいいんだから」

〔教えること(The Act of Teaching)——読む、聞く、見ることの違い〕

「読むより聞くのが良く、聞くより見るのが上だ。師匠や修行者の口から聖典の話を聞かせてもらうとよくわかる。そうすれば、余計なところにひっかかって無駄なことを考えずにすむ。

ハヌマーンは言っていたよ——〝兄弟！　私は日の吉凶も星占いのことも知らない。私はただ完全円満なラーマを想っているだけだ〟と。

聞くことより見る方がはるかにマシだ。見たならば疑いはみな消えてしまう。聖典にはいろんなことが書いてあるが、神様に直接に会わなかったら——あの御方の蓮華の御足を信じられなかったら——心が清浄にならなかったら——すべては無駄なことだ。暦には雨の予報がのっているが、暦

をしぼっても水は一滴も落ちてこないよ！　たったの一しずくだって落ちてきやしない」

〔思考はいつまでか――神を見るまで――覚者とは？〕

「聖典や経文とにらめっこして考えるのは何時までだと思うかね？　神様と直接に会うまでだ。蜜蜂がブンブンいっているのはいつまで？　花にとまるまでだ。花にとまって蜜を吸いはじめると、もう音をたてなくなる。

でも、もう一つ、神に会った後でも話をすることがある。その人の話はただ、神と神の歓喜についてだ。たとえば酔っぱらいが、〝カーリー万歳〟と言っているようなものだ。蜜蜂だって花にとまって蜜をたらふく飲んだ後で、ハッキリしない声でグーングーン言ってるだろう」

覚者の説明をすることで、タクールはご自分の境涯をそれとなく暗示なさるおつもりではないか――

「智者は、〝ネーティ、ネーティ（これでもない、これでもない）〟と分別判断する。この否定をつづけていって最後のところで大歓喜を得る。それがブラフマンだ。

智者はどんな傾向かというと――智者は聖典に従って行動する。

いつだったか、わたしはチャナクに連れていかれた。そこで何人かの修行者を見た。あるサードゥは裁縫をしていた（一同笑う）。わたしらを見るとその人は縫物を横に放り出して、それから足を組んで坐り直して、わたしらと話をはじめた（一同笑う）。

だが、智者は質問されなければ、神に関する話をしない。先ず時候のあいさつとか、健康のこととか、家族の様子などをきくものだよ。

しかし、覚者の様子は智者とは全く異(ちが)う。とにかく無頓着だ。着ているものもだらしなくしていたり、脱いで横っちょにかかえていたり――まるで子供みたいだ！

神様の実在を知っている人、これを智者と呼ぶんだよ。木には必ず火がふくまれているということ知る人が智者だ。木を燃やして物を煮て、食べて栄養をとることの出来る人、それが覚者だ。

そして覚者は八つの繋縛(けばく)を解(と)いてしまっている。愛欲や怒りがあるようでも、それは見かけだけのものだ」(訳註、八つの繋縛(けばく)――憎しみ、恥ずかしいと思う気持ち、恐れ、階級(カースト)の誇り、家柄の誇り、品の良さの誇り、悲しみを引きずること、他人のあら探し)

シャシャダル「(サンスクリットで)心の結び目は真っ二つに断ち切られ、すべての疑いは消滅す(バーガヴァタ・プラーナ 11・20・30)」

〔以前の話――クリシュナキショルの家に行ったこと――タクールの覚者的境地〕

聖ラーマクリシュナ「そうだ、一そうの汽船が航海していた。とつぜん、鉄の金具や釘やネジなどが上の方に飛び出てしまった。磁石山のそばを通ったので、鉄のものはみな緩んでしまったのさ。

わたしは以前(まえ)に、クリシュナキショルの家によく行ったよ。ある日行くと彼が、『あんたはどうしてパーン(キンマの葉)を噛むのですか?』と聞くので、『楽しいから噛むのさ。鏡に顔を映して眺めもするし、千人もの女のなかで裸踊りもするさ!』と言ってやった。すると、クリシュナキショルの奥さ

んが彼を叱りつけてこう言ったよ――『あなた、人を見てモノをおっしゃい。ラーマクリシュナに何てことを言うんですか』

この境地になると、愛欲や怒りなどは燃え尽きてしまっている。体には別に変化はないがね。他の人と体はどこも同じに見えるが、なかは空ろで清浄なものだ」

一信者「神を見た後も、ずっと肉体は残っているものでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「人によっては残りの業を果たすために残っているし、また、人々を導くために残っている場合もある。ガンジス河で体を浄めると罪が消えて解脱するとはいっても、盲目の目が明くわけではない。けれども、過去の罪をつぐなうために、また生まれ更る必要はなくなる。車の輪は、動かした力が働いている間は動き続ける。残りの力がなくなればそれまでさ。情欲や怒りはみな燃え尽きているが、何がしかのカルマを果たすために肉体は残っているんだよ」

シャシャダル「それをサンスカーラというのでございます」

聖ラーマクリシュナ「覚者はいつも神を見ている。だから明けっぴろげで無頓着なんだよ。目をあいているままで神様が見えるんだ。時には永遠不変のところから下りてきて変化無常の世界に住むし――時にはまた、無常の世界から永遠の世界に行く」

シャシャダル「そこはまだ、私には理解できませんが……」

聖ラーマクリシュナ「ネーティ、ネーティ（これでもない、これでもない）と分別判断しつづけたあげく、あの永遠完全なサッチダーナンダに到達するわけだ。彼らはこう考える――あの御方は生物ではない、

世界でもない、二十四の(存在)原理でもない――というふうに。そして、〝永遠完全〟に到達するとまた、あの御方があらゆるものになっていらっしゃる――生物にも、世界にも、二十四の(存在)原理にも――と見るようになる。

牛乳を凝らせてバターをとる。バターをとってみると、バターミルクがバターで、バターがバターミルクだということがわかる。外皮があっての中身、中身あっての外皮だ」(訳註――表があるから裏があり……の関係。氷あっての水、水あっての氷、バターミルクあってのバター、バターあってのバターミルク)

学者シャシャダル「(ブーダルに向かって微笑しながら)わかりましたか? これを理解するには大へんな力量がいりますよ!」

聖ラーマクリシュナ「バターってものがあればこそ、バターミルクがあるんだよ。バターを思い浮かべれば、いやでもバターミルクもいっしょに考えなければならない。バターミルクがなければバターもないからさ。だから、永遠なものを認めるなら、変化無常も認めなければならない。上昇と下降だ。形ある神も形のない神もハッキリ見た後が、こういう境地なんだよ! 形のある神は霊(チンマヤ――純粋意識により成るもの)の種々相、無形の神というのは完全円満なサッチダーナンダだ。

あの御方がすべてのものになっていらっしゃる。だから覚者にとっては〝この世は遊び小屋〟だ。智者にとっては〝この世は幻影の幕〟。ラームプラサードが、〝この世は幻影の幕〟と言ったら、ある人がやり返してこう歌った――

この世は楽しい遊び小屋
私は食べたり飲んだりしながら
愉快にあそんで暮らして行くよ
ほんに、あの医者わかっちゃいない
表っ面しか見ていない

それに較べりゃジャナカ王は
たぐい稀なる賢い御方
不足のものとて何一つなく
こちらもあちらも両方つかみ
コップにあふれるミルクを飲んだ

（一同大笑い）

ラームプラサードはベンガルの詩人で医者のカーストだった

ジャナカ王――ヴィデーハ国の王でラーマの妻となるシーターの父

こちらもあちらも――現実的にも霊的にも

覚者は神の喜びをもっとも豊富に楽しんでいる。ミルクの話を聞く人もあり、それを見る人もあり、また飲む人もある。覚者はミルクを飲んで楽しみ、しかも豊かに栄養をとっている」

タクールは少し黙っておられてから、学者にタバコを一服のんだら、とおっしゃった。学者シャシャダルは南東側の長ベランダに出てタバコを吸った。

智と覚智――タクールとヴェーダの見神者(リシ)たち

学者はすぐ戻ってきて、再び信者たちといっしょに床の上に坐った。タクールは小寝台の上に坐ってまたお話をなさる。

聖ラーマクリシュナ「(学者に向かって)あんたにこれを言っておきたい。歓喜にも三通りあるんだよ。――世俗の歓喜(ヴィシャヤーナンダ)、讃神の歓喜(バジャナーナンダ)、それからブラフマン(ブラフマーナンダ)の歓喜だ。皆がいつも追っかけている女と金の歓び――これが世俗の歓喜(ヴィシャヤーナンダ)。神の名を唱えたり讃歌をうたったりするときの歓びがバジャナーナンダ。そして、神を見るときの歓びがブラフマーナンダだ。ブラフマーナンダを得た後は、昔の見神者(リシ)たちは、自分の思う通り自由自在に暮らしなすった。

チャイタニヤ様(デーヴァ)には三通りの境地があって――深奥意識の状態、半意識状態、それから外部意識状態。深奥意識のときは至聖と対面して三昧境に入り、ジャダ・サマーディ(無分別三昧(ニルヴィカルパサマーディ))になった。半意識状態のときは外界の意識が少し残っていた。外部意識状態のときに称名讃歌のキールタンがお出来になったんだよ」

ハズラー「(学者に向かって)これで疑問が解けたでしょう」

聖ラーマクリシュナ「(学者に)サマーディとはどういうものかと言えば、あそこ(神)に心が溶けこむことだ。智者たちはジャダ・サマーディに入って――〝私〟が無くなる。信仰のヨーガでサマーディに入るとチェータナ・サマーディと言う。これには、主人に仕える〝私〟が残っている。または、

愛を楽しむ〝私〟、味を味わう〝私〟が残っている。神が主人で――信者が召使いだ。神は甘露そのもの――信者はそれを味わって楽しむ。神は無上の味――信者はそれを味わう人。砂糖にはなりたくない、砂糖をなめるのが好き、というわけさ」

学者シャシャダル「もしあの御方が、〝私〟をすっかり溶かしてしまわれたら、どうなりますか？もし、砂糖にしておしまいになったとしたら？」

聖ラーマクリシュナ「はっはっはっは、あんたの考えてることを、そのまま話しておくれよ。――『カウサリヤー母上の心のうちを、話していただきたいものです』（一同大笑い）（訳註、カウサリヤー――ラーマの母。ラーマーヤナの逸話の中の言葉をタクールが引用している）

ナーラダ、サナカ、サナータナ、サナンダ、サナトクマーラのことが聖典に出ていないかね？」

学者シャシャダル「は、おっしゃる通り、聖典に出ております」

聖ラーマクリシュナ「あの人たちは智者だったが、〝信者の私〟を持ちつづけていた。あんたはバーガヴァタを読まないのかい？」

学者シャシャダル「いくらか読みましたが、全部は読んでおりません」

聖ラーマクリシュナ「祈んなさい。あの御方は慈悲深い。あの御方が信者の祈りをお聞きにならないと思うかい？　あの御方はカルパタル（希望の叶う木）なんだよ。あの御方のそばへ行けば欲しいものは何でも得られる」

学者シャシャダル「私は、そこまで考えたことはありませんでした。今はすっかりわかったような

気がいたします」

聖ラーマクリシュナ「ブラフマン智を得た後でも、神はほんの少し〝私〟を残しておいて下さる。その〝私〟は〝信者の私〟、〝明知の私〟だ。そうやって、この無限の遊戯(リーラー)を観て味わい楽しむんだよ。『すりこぎは殆どすり減ってほんの僅かしか残っていないんだ。それが葦原に落ちて氏族全滅――ヤドゥ族は滅亡してしまった(訳註1)』だから覚者は、この〝信者の私〟と〝明知の私〟を残しておいて――いろいろ観て味わうために、また人を導くためにね」

〔見神者(リシ)たちの憶病――ヴェーダーンタが照らす新しい光(A new light of the Vedanta)〕

「むかしの見神者(リシ)たちは憶病だった。なぜだかわかるかい？　〝自分だけが何とかして彼岸(あちら)へ行こう。他の人のことなんかかまうものか〟こういう気持ちなんだよ。貧弱な木っ端(こっぱ)は、自分だけではどうやら水に浮いているが、鳥の一羽も止まればさっそく沈んでしまう。ナーラダたちは長い大きな丸太だから、自分はむろん浮いているが、その上、沢山の人間や動物をのせて向こう岸へ渡ることができる。汽船は自分で大海を渡るだけでなく、大勢の人間を乗せて運んでいける。

ナーラダたちは教師(アーチャーリヤ)でもあり、覚者でもある。ほかの見神者(リシ)たちよりずっと勇気があって強かった。手練(てな)れた遊びの玄人(くろうと)が賽(さい)をふるようなものだ。何を出そうか、六か、それとも五かい？　振るたんびに思い通りの目を出す。すごい腕前！　おまけに時々、ヒゲをなでつけたりしている。

ただの智者は憶病なものさ。下手な将棋差しのように――とにかく自分の駒を取られまいとして逃

げまわる。覚者は何一つ恐れない。彼は形ある神も無相の実在も、両方とも直接に見たんだからね！神様と話をしたんだからね！　神のよろこびを味わったんだからね！

あの御方を想って完全に満ち足りた心でいるのも楽しい。また、心が絶対境に溶け込まないで、変化活動の世界に遊んでいるのも楽しい。

ただの智者は、単調でつまらないね。ただ、〝そうじゃない、そうじゃない。そんなものは皆、嘘、まぼろしだ〟とばかり考えている。わたしゃ両手を開け放したから、なーんでもみんな受け入れるよ。

ある女の人が機織りをしている女友だちに会いに行った。友だちは糸を紡いでいた――いろんな種類の絹糸をね。機織りはその人を見て大喜びだった。そして、『わざわざ会いに来てくれて、ほんとに嬉しいよ。何とも言いようのないほど嬉しい。何か飲み物を持ってくるからね』と言って飲み物をとりに行った。一方、その人はいろんな色をした絹糸を見ているうちに、どうしても欲しくなった。彼女は一束の糸を盗って脇の下に隠した。やがて、機織り職人は飲み物を持ってきて――さあ飲んでおくれ、と熱心にすすめた。が、チラと糸の方に目をやるとすぐ、一束、客が盗ったことに気がつ

（訳註1）『すりこぎ……』この話は「マハーバーラタ」の物語からの引用。パーンドゥ軍に味方してクル族との戦いに勝利したクリシュナの一族であるヤドゥ族は、時が経ち驕り高ぶって聖仙を侮辱したために呪いをかけられ、棒をすり砕いた木くずの粉が水辺の草原に散らばったのが元で滅亡することになる。クリシュナも例外ではなく、狩人の矢で捨身する。

いた。そこで、糸を取り戻すために一計を案じたよ。

機織りはこう言った――『ずい分久しぶりに会ったねえ。ほんとに今日は嬉しい日だよ。私はあんたと二人でいっしょに踊りたくってたまらないよ』

客は答えた。『バーイ(姉妹)、私こそどんなにうれしいか知れない』そこで、二人は踊りはじめた。見ると、客は両手を上げるということを決してしないで踊っている。機織りは、『さあ、あんた、両手を上げて踊ろうよ。今日は特別嬉しい日なんだから――』

けれど、客は片方の腕をピッタリ脇に押しつけて、片方の手だけ上げて踊りつづける！　機織りは、『どうしたのさ、片っ方の手だけ上げて！　さあ、両手を上げて踊ろうよ。ほら、ごらんよ。私は両手を上げて踊ってるよ！』でも、客は片腕を脇に押しつけたまま、ニヤニヤ笑いながら片手だけ上げて踊っている。そして、『こういう踊りしか知らないんだよ！』と言う。

わたしゃ、片腕を脇にくっつけたりはしない。わたしゃ、両手を放している。――恐ろしいものは何もないんだ。つまりわたしは、永遠(ニティヤ)と変化(リーラー)と、二つとも受けいれる」

智者は、人に尊敬されたいという欲、自由(解脱)になりたいという欲があるので、両手をあげて踊ることができない、とタクールはおっしゃったのだろうか？

智者は永遠(ニティヤ)と変化(リーラー)の二つとも受け入れることはない。また、束縛されることを怖れている。だが覚者は違う。覚者には怖れるものは何もない。

聖ラーマクリシュナ「ケーシャブ・センに、『〝私〟を捨てなけりゃ神はつかめないよ』と言ったら彼は、

『そんなことをしたら先生、教団が維持できません』と言った。そこでわたしはこう言ってきかせたよ。『〝未熟な私〟や〝悪い私〟を捨てろと言っているんだよ。〝熟した私〟や〝子供の私〟、〝神の召使いの私〟ならいい』〝無明無知の私〟――つまりこれが〝未熟の私〟なんだが、これは太くドッカリした棒のようなものだ。サッチダーナンダの水がこの棒で二つの部分に分けられている。しかし、〝神の召使いの私〟や〝神の子の私〟、〝明知の私〟は水の上に引いた線のようなものだ。水が一つであることははっきり見える――ただ時たま、一筋（ひとすじ）の線で二つに分かれているように見えることもあるが、とにかく、一つの水だとちゃんとわかるんだよ。

シャンカラ大師（アーチャーリヤ）は〝明知の私〟を残しておきなすった――人々を導くためにね」（訳註、シャンカラ大師（アーチャーリヤ）――個人の本体であるアートマンと根本原理であるブラフマンは同一であるという〝不二一元論（アドヴァイタ）〟を説いた中世の哲学者）

〔ブラフマン智獲得後の〝信者の私〟――ゴーピーの態度〕

「ブラフマン智を得た後も、あの御方は多くの人に〝明智の私〟や〝信者の私〟を残しておいて下さる。ハヌマーンは有形の神、無形の神（梵（ブラフマン））を覚った後、主人と召使いの態度と信者の態度をとりつづけていた。ラーマにこう申し上げた――『ラーマよ、時にはあなたが全体で私はその一部分だと感じています。また時には、あなたが主人で私は召使いだと感じています。それからラーマよ、第一原理の智識が生じたときは、あなたは私、私はあなたです！』

ヤショーダーはクリシュナと別れて、悲しみのあまり愛人ラーダーのもとをたずねた。ヤショーダーの悲嘆を見て、ラーダーは自分の本性を示してみせてこう言った。『クリシュナはチッダートマ(真我(プルシャ)・男性原理)であり、このわたしはチットシャクティ(物質自然(プラクリティ)・女性原理)です。お母さん、何でも希(のぞ)みを叶えてあげますよ』するとヤショーダーは答えた。『大実母(マー)よ、私はブラフマン智をほしいとは思いません。ただこのことだけお恵み下さいまし――。瞑想のとき、ゴパール(クリシュナの幼時)の姿がいつも見えますように――。それから、クリシュナの信者といつも交わって、その信者さんたちにいつも奉仕することができますように――』

ゴーピーたちは至聖なる神のお姿を見たいと願った。クリシュナは、『では、ヤムナー河に潜るように――』とおっしゃった。潜るが早いかヴァイクンタ(ヴィシュヌ神の天国)に到着していて――至聖(かみ)さまは六種の神相を完全に備えたお姿でそこにいらっしゃった。ところがゴーピーたちはどうも気に入らない。そしてクリシュナにこう申し上げた。――『私たちはゴパールに会って、ゴパールのお世話をすることよりほか何も希(のぞ)みません』と。

マトゥラーに行く前に、クリシュナはゴーピーたちにぜひともブラフマン智を与えようと思いなすった。それで、こう言いなすった――『わたしは、あらゆるものの内と外に遍在しているのだよ。お前たちはどうして、この一つの形しか見ようとしないんだね?』

ゴーピーたちは声を張り上げて叫んだ――『クリシュナ、あんたは私たちを捨ててどこかへ行きたいものだから、それでブラフマン智を教えようとするんでしょう?』

ゴーピーたちの気持ちはどういうものだったかわかるかい？　自分たちはラーダーのもの、そしてラーダーは私たちのもの――」

一人の信者「この〝信者の私〟は完全に無くなることはないのですか？」

〔聖ラーマクリシュナとヴェーダーンタ（Sri Ramkrishna and the Vedanta）〕

聖ラーマクリシュナ「その〝私〟も時々なくなるよ。その時はブラフマン智が生じて、サマーディに入るんだよ。わたしもそうなる。でも、いつもというわけじゃないがね。サ、レ、ガ、マ、パ、ダ、ニ（インド音楽のドレミファソラシド）――でも、ニの音（高い音）を長いこと出していることはできない。――低い音階に下げなけりゃならん。わたしはマーにこう言うんだよ。『マー、わたしにブラフマン智をくれないでおくれ』と。以前は形ある神の信仰者が大勢来たものだ。その後、今様のブラフマン智行者が来はじめた！　あの当時は外の意識が全くなくなってサマーディに入ったものだよ。――そして意識が戻ると、『マー、わたしにブラフマン智をくれるな』とたのんだものさ」

学者シャシャダル「私どもの言うことを、あの御方はきいて下さるのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「神はカルパタル（希望の叶う木）だ。願うことは必ず叶うよ。しかし、木のそばに行ってお願いしなけりゃいけない。そうすれば話は通じるよ。

でも、ひとつ言っておくが――あの御方は人の心をお見通しだ。霊の修行をしているときに心に思ったことは実現する。心に想像した通りのものが得られる。ある魔術師が王様の前で手品を見せて

いた。その途中で時々、〝王様、お金を下さい。王様、着物を下さい〟と、合いの手を入れる。ちょうどそう言っていたとき、どうしたはずみか舌がめくれ上がって上アゴにくっついてしまった。自然とクムバカ(ヨーガの呼吸抑止)になって、口もきけず、耳もきこえず、身動きもしない！　皆は、煉瓦で墓穴を作ってそのままの姿で埋めておいた！　千年ほど経ってその墓穴を誰かが掘り出した。見ると一人の男がサマーディに入って坐っている！　皆は、これは偉い聖者に違いない、と思って礼拝供養をしはじめた。誰かが体をゆすったとき、舌が上アゴから離れた。とたんに魔術師は意識をとり戻し、かん高い声をあげて叫び出した――〝サァサァ種も仕掛けもありませんよ。首尾よくまいりましたら、王様、お金をどうぞ、着物をどうぞいただかして！〟(訳註――願ったものはくだらないものでも得られる例え)

わたしはよく泣きながらこう祈ったものだ――『マー、稲妻で分別心(ヴィチャール)をぶち壊しておくれ！』」

学者シャシャダル「では、あなた様にも、それ(分別心)があったのですか」

聖ラーマクリシュナ「うん、そういうときもあったよ」

学者「では、私どもでもそれを無くすことができましょうか。あなた様はどんな方法で無くされましたか?」

聖ラーマクリシュナ「まあ、どうにかこうにかして無くしたよ」

見神が人生の目的――その方法

〔威力と甘美――威力を知ろうとしない人〕

タクールはしばらく黙っておられる。やがて、また語り出された。

聖ラーマクリシュナ「神はカルパタル（希望の叶う木）だ。あの御方のそばに行ってお願いすることだ。そうすれば願いごとは何でも叶えられるよ。

神はどれほどのものをお創りになったことか。あの御方の果てしない大宇宙――あの御方の無限に豊かで力強い智識が、わたし等にとって必要だろうか。それに、もし知りたいと思うなら、先ずあの御方をつかまなけりゃならない。そのあとで、あの御方がご自分からいろいろ教えて下さる。ジャドウ・マリックが何軒家を持っているか、何枚株券を持っているか、わたしは知る必要なんかないよ。わたしに必要なのは、あの人に会って話をすることさ！　堀を飛び越えてもいい、拝み倒してもいい、門番にこずかれてもいいんだ！　話し合った後で、何がどれほどあるのか質問さえすれば、旦那が自ら答えてくれる。それに、旦那と話ができるようになれば、執事や事務員たちも尊敬してくれるよ（一同笑う）。

神様のご威光や豊かさを知りたいと思わん人もいるんだよ。酒店にどれだけ酒があるか、わたしゃ知る必要ない！　わたしは一ビンあれば正体もなくなるんだから――。ご威光のすべてなどとんでもない。わたしゃ、ほんのちょっと飲んだだけで酔っぱらうんだからね！」

〔智識のヨーガは非常に困難――アヴァターラたちは永遠完成者（ニティヤシッダ）〕

「信仰（バクティ）のヨーガも、智識（ジュニャーナ）のヨーガもみんな道だ。そういう道をすすんで行けば、あの御方のところに

着く。信仰の道はやさしい道。智慧分別の道は難しい道だ。

どの道がいいか考える必要もない。ヴィジャイとこのことについて何日も何日も話し合ったがね。わたしはヴィジャイに話してきかせたよ――『もし、神様！　あなたは何者でどういう性質なのか、私に見せて下さい！』と言っていつも祈っていた男の話を。

智慧分別の道は苦しく難しい道だ。パールヴァティー(マーの化身)はギリ王(パールヴァティーの父、ヒマラヤの王)に、神のさまざまな相(すがた)を現して見せたあとでこう言った。『お父上、もしブラフマン智がお希(のぞ)みなら、サードゥと交際なさいまし――』

ブラフマンは口で説明できるようなものじゃない。ラーマ・ギーター(訳註2)にあるが、『ただそれに近い表現を通して説明できるだけだ』と。たとえば、〝ガンガーの牛飼いの村〟について話すときは、その村はガンジス河の岸辺にあるということを、それとなく教えているのだ。無形無相のブラフマンに対面できないということはないだろう？　でもまあ、ずい分難しいことだ。俗な気持ちがほんのひとかけらあってもダメだ。感覚の対象――色、形、味、匂い、手触り、音――こういうものをみんな捨てて、(分別)心が消えてなくなって、そうなってはじめて感じることができるんだよ。しかも〝ソレがアル〟ということだけわかるんだよ」

学者「〝彼は実在す〟と認識せる……等」(カタ・ウパニシャッドの引用)

聖ラーマクリシュナ「あの御方を覚るためには、一つの決まった態度をとることだ。勇者の態度、女友達の態度、それから召使いの態度、または子供の態度をね」

マニ・マリック「そうすることによって、神に愛着が出てくるのでございましょうな」

聖ラーマクリシュナ「わたしはね、女友達の態度を長い間とっていたよ。いつもこう言っていた――『わたしは歓喜（よろこび）に満ちた梵（ブラフマイー）の女神の侍女だ。さあ、マーの侍女さんたち、わたしを仲間に入れておくれ。わたしは大威張りで歩きまわるよ。〝わたしは梵（ブラフマイー）の女神のお女中だよ〟と言いふらしながら――』

何の修行もしないのに神をつかむ人もいる。その人たちは永遠（ニティヤ）の完成者（シッダ）と呼ばれる人だ。称名誦経や苦行をして神をつかむ人たちは修行完成者（サーダナシッダ）と呼ばれる。それから恩寵完成者（クリパシッダ）――千年も暗闇だった部屋にランプを持って入れば、途端に明るくなってしまう！

それから、突然完成者（ハタートシッダ）というのもある。大金持ちの目にとまった貧しい家の伜（せがれ）のようなものだ。旦那は娘をその息子にめあわせる。娘といっしょに、家屋敷、馬車、男女の召使い、みんな付けてくれる。

それから、夢中完成者（スヴァプナシッダ）というのもある――夢で見神した人だ」

スレンドラ「はっはっはっは。じゃ、私どもも眠りましょうか。覚めたら旦那（バーブ）になっているかも知れません」

（訳註2）ラーマ・ギーター――ラーマ王子の物語『ラーマーヤナ』の神話と伝説を、15世紀頃、ヴェーダーンタの不二一元論を基調に改作してラーマ信仰を教理的に高めたものが『アディヤートマ・ラーマーヤナ』で、その最終巻第五章を「ラーマ・ギーター」といい、ラーマが弟のラクシュマナに、〝ブラフマンのみ実在でその他のものはすべて夢まぼろしである〟と教えている。

聖ラーマクリシュナ「(やさしく)お前は今でも旦那だよ。〝カ〟にアをつけると〝カー〟になる。そこに又、アをつけるのはムダというものさ。つけてもやっぱりカーだよ!(一同大笑い)(訳註、『〝カ〟にアをつけると……』――スレンドラはもうすでに旦那〈神から祝福を受けている者〉となっているので、もうこれ以上祝福を受けても同じだ、という喩え)

永遠完成者(ニティヤシッダ)は別格だよ。アラニの木(こすって火をとるための木片)のように、ちょっとこすりさえすればすぐ火がつく――こすらなくてもいい場合さえある。ほんの少し修行すれば永遠完成者(ニティヤシッダ)は神をつかむし、また修行しなくても覚る。

しかし、永遠完成者(ニティヤシッダ)は神をつかんだ後修行する。ヒョウタンやカボチャみたいに、先に実がなってそのあとで花だ」

学者は、ヒョウタン、カボチャは先に実がなる、という言葉を聞いて笑っていた。

聖ラーマクリシュナ「それから、永遠完成者(ニティヤシッダ)はホーマ鳥のようだ。母鳥は大空の高いところに住んでいる。卵から孵(かえ)ったヒナは、大地に向けて落ちてくる。落ちながら羽が生え、目が明く。地面に体がぶつからないうちに、母鳥の方に向かってすごい速さで駆け上がる。マーはどこだ、マーはどこだ!

プラフラーダをごらん、〝ク〟という字を書いては、涙を滝のように流していただろう!(〝ク〟の字でクリシュナを思い出して泣いた)」

タクールは永遠完成者(ニティヤシッダ)の話によせて――アラニの木やホーマ鳥の例を通じて――ご自身の境涯を知らせようとなさったのか?

タクールは、学者シャシャダルの謙遜な態度に、大そう満足しておられた。この学者の人となりを信者たちに向かってほめられた。

聖ラーマクリシュナ「このお人は、ほんとに立派だね。土の壁に釘を打ちこむのはわけもない。石に打てば、釘の頭が壊れても石は何ともない。千度神の話を聞いても、心がさっぱり目覚めないような人も大勢いる。ワニみたいに、体に刀が刺し通らないんだよ！」

〔聖典研究より修行をすべし――識別（ヴィヴェーカ）〕

学者「ワニの腹に槍を刺せば通ります」（一同笑う）

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハハ。山ほど聖典を読んで何になる？　フャーラジョフィー！」（一同大笑）〈訳註、フャーラジョフィー――英単語のフィロソフィ〈哲学〉をなまってこう発音された〉

学者「あっはっはっはっは。ほんとに、フャーラジョフィーです」

聖ラーマクリシュナ「偉そうなこと言って何になる？　弓を習うには、先ずバナナの幹を的にしなければならん。その次に葦の茎、その次にローソクの芯、そのあとで飛ぶ鳥を狙う。だから先ず、形ある神に心を集中しなけりゃならないんだよ。

それから、三グナを超越した信者がいる――ナーラダたちのような永遠の信者だ。その人の信仰では、シャーマ（クリシュナ）の像も霊そのもの、祀られた場所も霊そのもの、信者や従者も霊そのものなんだよ。つまり、永遠なる神、永遠なる信者、永遠なる聖地というわけだ。

ネーティ、ネーティ(これでもない、これでもない)と智慧分別する人たちは、神の化身というものを認めない。ハズラーはうまいことを言ったよ――『神の化身は信仰者だけのためにある。智者にとっては神の化身は必要ない。彼等は〝我はソレなり〟に充足して坐りこんでいる』と」

タクールと信者たちはみな、しばらくの間黙っていた。こんどは学者が話し出した。

学者シャシャダル「ときに、無神経な態度をなくすにはどうしたらいいものでしょうか? 人が笑っているのを見ると、筋肉と神経の働きを想像します。人の悲しみを見ると、神経組織の働きを想像するのですが――」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハハ。だからナラヤン・シャーストリーがよく言ったものだよ。――『聖典研究の害は、議論分別の類いが増すことだ』と」

学者シャシャダル「はあ、で、そこから脱けだす方法は何もないのでしょうか?」

聖ラーマクリシュナ「あるさ。識別(ヴィヴェーカ)だ。こんな歌がある――

識別(ヴィヴェーカ)という名のその息子に
真理のことを尋ねよう
識別(ヴィヴェーカ)、離欲(ヴァイラーギャ)、神を熱愛(アスラーガ)すること――これが方法だよ。識別(ヴィヴェーカ)なしに正しいことは言えないよ。サマーディイーはさんざ説明したあげく、『神は無味であります!』と言った。ある人が言った――『私の叔父のところでは、牛小屋いっぱい馬を飼っています』と。牛小屋で馬を飼うかい?

ハハハハハ、あんたはチャナバラになっている。こんどは二日から五日位、シロップに浸けておけ

ば自分のためにもいいし、はたの人のためにもよくなるよ！」（訳註、チャナバラ――バターで揚げた菓子。揚げた後、熱いミルクと香料、シロップにしばらく浸してから食べる）

学者「（かすかに笑って）このチャナバラは、こげて木炭（すみ）のようになってしまいました」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、いやいや、アブラ虫色だよ」

ハズラー「ちょうどよくコンガリ焼けておりますから――こんどはよくシロップを吸い込むでしょう」

〔以前の話――トーター・プリーの教え――ギーターの目的――熱心になれ〕

聖ラーマクリシュナ「わかるかい、聖典やお経をあんまり読む必要はないんだ。読みすぎると、〝ああでもない、こうでもない〟と余計なことが気にかかるようになる。ナングタ（訳註3）はよくこう言って教えたものだよ――『ギーターを十回くりかえして言えばギーターの一番肝心なところがわかる』つまり、ギーターギーターと十回も言うと、ターギーターギー（捨離）になってくる。

方法（みち）はね、識別（ヴィヴェーカ）と離欲（ヴァイラーギャ）、それから神を熱愛（アヌラーガ）すること。どんなふうに愛するかって？　神様に命までもと恋い焦がれる――ちょうど、仔牛を追いかける母牛のように」

（訳註3）ナングタ――ラーマクリシュナにヴェーダーンタを教えたトーター・プリーのこと。トーター・プリーに所有物は一切なく、いつも裸で過ごしていたので、〝裸の人（ナングタ）〟と呼ばれた。

学者「ヴェーダにも、そっくり同じことが書いてあります。〝母牛が仔牛を呼ぶごとく、われらは君（神）を呼び求む〟」

聖ラーマクリシュナ「恋い慕って泣け。そして、識別と離欲を行じてすべてを放すことができたら、その人は神様と対面できる。

夢中になって慕うようになると、傍(はた)から見ると気狂いのようになる。それは智識の道だろうと信仰の道だろうと同じこと。賢者ドゥルヴァーサは智識を得て気狂いのようになった。

世間の人の智識と、すべてを捨てた人の智識は大違いだ。世間の人の智識は、ランプの明かりのように部屋のなかを明るくすることはできるが、自分の体と家政の切り盛り以外のことは何もわからない。すべてを捨てた人の智識は太陽の光だよ！　その光で部屋の内外(うちそと)がみな見える。チャイタニヤ様(デーヴァ)の智識は太陽の智慧だ――智慧の太陽の光だよ！　それにその中には、信仰の月のやわらかな光も含まれていた。ブラフマンの智慧、信仰の愛、二つともあった」

タクールは、チャイタニヤ様(デーヴァ)の境涯を語りながら、ご自分の境涯を示されたのであろうか？

〔智識のヨーガと信仰のヨーガ――末世(カリユガ)ではナーラダの信仰〕

「否定を通じて霊が目覚める場合と、肯定を通じて目覚める場合がある。信仰という肯定の道があり、また否定の道もある。あんたは否定の方を話しているね。だが、〝それは極めて難しいところ、師匠も弟子もないところ！〟

ジャナカ王のところへシュカデーヴァがブラフマンの智識を教わりに行きなすった。するとジャナカ王は、『先に授業料をいただこう。君がブラフマン智を得たら、もう授業料を払おうとしないだろうからね。そのときは師匠と弟子の区別がなくなるんだから』とおっしゃった。

肯定も否定も、みな目的地へ行く道だ。人の考え方は無限、道もまた無限だ。だが一つ言っておく。現代のような末世（カリユガ）にはナーラダが説いた信仰の道――これが決まりだ。この道では先ず信仰、信仰が成熟してきてバーヴァ、バーヴァが強く高くなってマハーバーヴァ、そして愛（プレーマ）になる。普通の人間にはマハーバーヴァと愛（プレーマ）まで行けない。そこまで行った人は本質をつかんだ――つまり神をつかんだ人だ」

学者「ほんとに、口で説明して人にわからせようとすると、非常に多くの言葉を使わなければなりません」

聖ラーマクリシュナ「あんた、頭とシッポをとって話せばいいんだよ、ね」

カーリーとブラフマン、ブラフマンとシャクティは不異（おなじ）――全宗教の調和

マニ・マリック氏と学者が話をしている。マニ・マリックはブラフマ協会（サマージ）の人である。学者はブラフマ協会の短所長所を、遠慮ない言葉で滔々（とうとう）と論じ立てている。タクールは小寝台の上にお坐りになって、それを眺めては笑っておられる。そして時々、こんなことをおっしゃるのだ――「これはサットヴァのタマスだ――英雄の態度だね。こういうものは必要だ。正しくないことやごまかしを見たら黙って

いないんだ。悪い女が最高の目的(神)を邪魔しに来たと思え。そんなときはこの英雄の態度をとらなくちゃいけない。そんなときはこう言うのさ――『このバカ女！　私の一番大事なものを傷つけに来たりして！　今すぐお前の体を引っ裂いてくれる』」

　また笑いながら、こうもおっしゃった――「マニ・マリックは長年ブラフマ協会の教えに従ってきたんだから、あれをあんたの意見通りの考えに変えることは無理だよ。古くからの習慣が今すぐ止められるかい？　ある熱心なヒンドゥー教徒がいて、いつもジャガダムバー(「世界の母」の意)を礼拝供養して称名にはげんでいた。イスラム教徒が国を征服したとき、彼等はその信者をつかまえてイスラム教に無理矢理改宗させた。そして、『お前はもうイスラム教徒なんだぞ！　アッラーと唱えろ！　これからはアッラーの名だけを唱えるんだぞ！』と言いつけた。その信者はやっとの思いで、〝アラー、アラー〟と言いはじめた。ところが時たま、〝ジャガダムバー〟が口からもれ出てくる。それを耳にしたイスラム教徒は彼を打ちすえようとした。すると彼はこう言った。――『お許し下さい！　打たないで下さい。私はお前さん方のアッラーの名を唱えようと一生懸命なんです。でも、私どものジャガダムバーが喉元までいっぱい詰まっていて、お前さん方のアッラーを押しのけてしまいなさるのです』(一同笑う)

(学者に向かって笑いながら)マニ・マリックに、何も言いなさんな。

　いいかい、人それぞれに好みがちがうし胃の力もちがう。神さまはいろんな宗教、いろんな教義をお創りになった。理解力がそれぞれ違うために――。

皆がブラフマン智の所有者になれるわけではない。だから、あの御方は形ある神を拝む方法も用意して下すったんだよ。母さんが子供たちのために魚を買ってくる。その魚をスープにしたり、酢魚にしたり、フライにしたり、ピラフにしたりして下さる。どの子の胃袋もピラフを消化できるわけじゃない。だから、子によってはスープにしてやったりする――胃の弱い子もいるからね。そうかと思うと、酢魚を食べたがったり、フライを注文したりするのもいる。生まれつき違うんだから――。それに、能力が違うんだからね」

一同は沈黙している。タクールは学者に向かっておっしゃった――「行ってお詣りしていらっしゃい。それから少し庭を散歩していらっしゃい」

時間は五時半になった。学者は仲間といっしょに部屋を出ていった。神殿を参拝するためである。信者の誰かれもその人たちといっしょに行った。

しばらくして、タクールと校長は連れだってぶらぶら歩きながら、ガンガー河畔のレンガ敷きのガートの方に行った。タクールは校長におっしゃる――「バブラームはこのごろ、『学問したって何になるか』なんて言っているよ」

ガンガーの岸辺でタクールと学者は出会った。タクールは、「カーリー殿に行くんだろう？　そうだったね」とおっしゃる。学者はまごついた様子で、「はあ、ごいっしょにお詣りいたしましょう」と言った。

タクールはニコニコしていらっしゃる。チャドニーの中を通ってカーリー殿の方へ行きながらお話

しになる――「こういう歌があるんだよ」と、甘くやさしいお声で歌われた。

わたしの母さん(マー)　なぜ黒い！
黒い肌したハダカの女
胸の蓮華に灯をともす！

チャドニーから中庭に入ると、「また、こんな歌がある」とおっしゃってお歌いになる――

智慧の灯を部屋にともして
梵の女神の姿を見よや

お堂に入ると、タクールは額(ぬか)ずいて礼拝(プラナーム)なさった。マーの聖なる蓮華の御足もとにハイビスカスとビルヴァの花が供えてあり、マーの三つの眼は言いようもなくやさしいまなざしで信者を眺めていらっしゃった。腕は無畏の印相である。マーはバラナシ絹の衣を着て、様々な装身具を身につけていらっしゃる。

聖像を見ながらブーダルの兄が言った――「ナヴィンという彫刻家が作ったと聞いております」タクールは、「そんなことは知らない。ただ、彼女が大霊の権化だということだけわかっている！」とおっ

しゃった。

信者たちと共にタクールは南側のナト寺院（マンディル）に向かってぶらぶら歩いていらっしゃる！　犠牲（いけにえ）をあげる場所を見ながら学者は言った――「マーは、雄山羊の切られるところをご覧になれない」（一同笑う）

やがて、タクールはお戻りになる。バブラームに、「おゥ、いっしょに来いよ！」とおっしゃった。校長もいっしょに従（つ）いていった。

夕方になった。部屋の西側の円ベランダに出てタクールはお坐りになった。半ば恍惚状態である。そばにバブラームと校長がいる。

近ごろはタクールのお世話をする人がいなくて不自由である。ラカールはこのごろ、ここに泊まっていない。何人かいるにはいるが、彼等はタクールが霊的に特殊な状態におなりのときは、手を触れることもできない。タクールはバブラームに何か伝えようと（前三昧で）――〝ハーチューナーラーチュ〟と発音された。「こんな状態のときは、もう誰に触ってもらうこともできない。お前がここにいるといいんだがな」ということだ。

〔得神と行事の脱落――新しい鍋――在家の信者と不貞な妻〕

学者は神殿の参拝をすませてから、タクールの部屋に戻ってきた。タクールは西側の円ベランダから声をお掛けになる――「あんた、何か飲み物を飲みなさいよ」学者は、「私はまだ夕べの祈りをすま

せておりませんので――」と答えた。するとタクールは法悦に酔った様子で歌をおうたいになる。立ち上がられた――

ガヤー　ガンガー　プラバースや
カーシー　カーンチーに行かずとも
カーリー　カーリー　カーリーと呼んで
わたしゃ最期の息をひく

朝、昼、晩にカーリー呼べば
祈祷(いのり)も勤行(つとめ)も要(い)りはせぬ
勤行(つとめ)はあなたのそばまでゆくが
決して一体(いっしょ)になりはせぬ

慈善　誓願　供えもの
それは　わたしにゃ用はない
この世の愛をひとまとめ
大実母(マー)の赤い御足に捧げよう

タクールは、愛に酔ったような表情でまたおっしゃった――「夕べの祈りはいつまでだ？　オームをとなえると心が神に溶けこむようになるまで――」

学者「では、飲み物をいただいて、その後で夕拝をいたしましょう」

聖ラーマクリシュナ「わたしは、あんたの流れに逆らいたくないよ。その時期でもないのに行事を捨てるのはよくない。果実がなれば花は自然に落ちる。まだ青いうちにココナッツの枝を無理に引っ張るものじゃない。そんなことしてへし折ったら、木のために害になるからね」

スレンドラが家に帰ろうとしていた。友人たちに自分の馬車に乗るようにすすめている。

スレンドラ「マヘンドラさん、ごいっしょにいかがですか？」

タクールはまだうっとりして、平常の意識状態には戻っておられない。そのご様子のままスレンドラに向かって、「お前の馬が引けないほど、大勢人を乗せるなよ」とおっしゃる。スレンドラは、タクールを拝して部屋から出ていった。

学者は夕拝をしに行った。校長とバブラームはカルカッタへ帰るため、タクールにごあいさつした。タクールはまだうっとりとしておられる。

聖ラーマクリシュナ「（校長に向かって）口がきけない。も少しここにいろ」

校長はまた坐った。タクールが何か命令されるかと待っている。タクールはバブラームにも坐るようにと手招きをされた。バブラームは校長に、「では、もう少しここにいましょう」と言った。タクー

ルは、「すこし扇いでくれ」とおっしゃる。ババラームは扇ぎ、校長も手伝って扇ぐ。

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かってやさしく)近頃あんまりここに来ないが、どうしたんだね?」

校長「はい、特別な理由はないのですが、家に用事がございまして――」

聖ラーマクリシュナ「ババラームの生まれつきの素質が、昨日すっかりわかったよ。だから、ここに住めと、こんなにすすめているんだ。母鳥は卵を孵す時期をよくわきまえている。これたちの魂は清浄だ。まだ女と金のなかに落ちていないからね。そうだろう?」

校長「おっしゃる通りでございます。まだシミがついておりません」

聖ラーマクリシュナ「新しい鍋だ。牛乳をいれておいても悪くならないよ」

校長「おっしゃる通りです」

聖ラーマクリシュナ「ババラームがここに住む必要があるんだよ。わたしはね、いろんな霊的状態になるんだよ。だから、あれがいてくれると、とても助かるんだけどねえ。あれは、『そのうち、だんだんここに住むようにいたしましょう。あまり急だと、イザコザが起こりそうだから――。家庭の人たちがごたごた言いますから!』と言うのさ。わたしは、『土曜と日曜には来い』と言ってある」

一方、学者は夕拝をすませて部屋に入ってきた。学者といっしょにブーダルと彼の長兄(原典註)がついてきた。学者は、今度は飲み物をいただけるだろう。

ブーダルの長兄が、「私どもはどうしたらよろしいでしょうか。私どもの修行方法をお教えいただけませんか?」と申し上げた。

聖ラーマクリシュナ「お前は、熱心に解脱を望んでいる求道者（ムムクシュ）だね。一生懸命になりさえすれば神を覚れるよ。でも、祖霊祭（シュラーダ）で死者に供えた食物を食べるなよ。この世では不貞な妻のように暮らせ。不貞な妻は家の中でせっせと家事にはげんでいるが、心は昼も夜も情人のことを想っている。この世の務めは果たせ。だが、心はいつも神のところに置いておけ」

タクールが、「腰掛けに坐ってお飲み――」とおっしゃったので、学者は飲み物を頂戴した。

飲み終わった学者にタクールはおっしゃる――「あんたはギーターを読んだにちがいないが――皆から尊敬される人には神の特別の力が具わっている、とあるよ」

学者「ヤド　ヤド　ヴィブーティマト　サットヴァン　シュリーマッド　ウールジタム　エーヴァ（栄光に輝くもの　壮麗（そうれい）なもの　偉大なもの　善美なものはすべて……）」（サンスクリットでギーターのその部分――ギーター 10・41）

聖ラーマクリシュナ「あんたのなかにも、確かにあの御方の力がある」

学者「では、私の誓願通りに努力をつづけてよろしいのですね？」

タクールは渋々、「ああ、いいよ」とおっしゃって、すぐ別の話に切り替えてしまわれた。

聖ラーマクリシュナ「力（シャクティ）は認めなけりゃならん。ヴィディヤサーガルが、『神は、ある人には特別

（原典註）ブーダルの長兄は晩年、ベナレスでたった一人で聖者のように清らかに暮らした。タクールのことを終生慕っていた。

多くの力を与えたりなさるのですか？』と聞くから、わたしはこう言ったよ――『そうでなかったら、どうして一人で百人もの人を殺すことができるんだね？　ヴィクトリア女王がこんなに尊敬されるのはどうしてだね、力があるからだろう？』と。わたしは、『あんたはそう思わないかい？』とたたみこんだら、『そうですね、そう思います』と言ったっけ――」

学者はお別れのあいさつをして、タクールに対して額ずいて礼拝した。同行の友人たちも礼拝した。

タクールは、「また来て下さい。（大麻吸いは）大麻吸いに会うと、無性に嬉しくてね――抱きついたりすることもあるが――ほかの人に会うと隠れてしまう。牝牛は自分の仔の体は舐めてやるが、よその牛がくると突き飛ばす」（一同笑う）

学者が部屋から出て行くと、タクールは笑いながらおっしゃった。――「たった一日で（英語の発音で）ダイルト（薄まる・溶ける）したね！　ずい分謙遜だったよ――そして、すべて受け入れた！」

アシャル月の白分七日目。西のベランダに月の光が注いでいる。タクールはまだそこに坐っておられる。校長は拝礼した。タクールはやさしく、「帰るのかい？」とおっしゃった。

校長「はあ、おいとま致します」

聖ラーマクリシュナ「みんなの家に時々行きたいと思っているんだよ。お前のところにも一度行くよ、いいかい？」

校長「はあ、結構でございますとも――」